

Title	労働掠奪説と労働価値説
Sub Title	
Author	中山, 英一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1918
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.12, No.3 (1918. 3) ,p.394(869)- 401(93)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19180300-0086

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

勞働掠奪説と勞働價值説

中山 英 一

勞働掠奪説は必しも價值學説と干係を有せず
價值説は古くより偉大なる思想家の解決せんと
試みたる、經濟學上の重要問題なり。而して經
濟學は價值の要素を究めんとするに當り、勞働
の商品の價值に影響する所大なるを認めざるを
得ざりき。即ち勞働價值説に於て經濟學は一應
此問題を解決したり。アダムスミスは此説の創
始者と認めらる。但し彼は他の問題に於けると
同じく此場合に於ても折衷主義の立場を捨てざ
りき。然るにリカルドは確實に勞働價值説を根
底として、彼の思索を進めし事疑ふ可からず。
尤も彼は勞働を以て唯一の價值決定要素たる事

を主張したるに非ずと雖も、研究の順序として
一應此事を承認したるなり。
若しも價值が全然勞働に依つて生産せらるる
ものならば、土地資本等の所有者の所得は、勞
働者に依りて創造せられし價值の奪取なる事を
意味す。換言せば地代利潤その他一般無勤勞所
得は、勞働者に對して犯されし盜に外ならず。
斯く勞働掠奪説は、學問上承認せられし價值説
の論理的結構として現はれ、從て社會主義者は、
現社會制度の讚美者に依て武器を與へらるるの
觀を呈するに至れり。

リカルドの名著の現はれし後間もなく、社會
主義的精神を以て彼の價值説を利用するの試み
をなす者現はれたり。就中キリアム・タムソンの
『人間を最も幸福に導く富の分配に就ての研究』
は後年マルクスの著作を通じて『餘剩價值』の
名目の下に唱導せられたる、所得學説を收むる
を以て有名なり。タムソンは『富は勞働に依て

生産さる』との原理より出發す。欲求の對象を
富たらしむるものは勞働の外あるなし。單なる
物の効用は何等かの形態に於ける勞働が、之に
加へらるるに至るまでは決して富を構成する事
なし。而して其時に於て始めてそは一切の他の
欲求對象より區別せられて實となるものなり。
現制度の下に於ては、生産要具は勞働者の
手に存せずして生産に參與せざる人の手に存す
故に何物かを生産せんと欲せば、之を賃借せざ
る可からず。然して彼は是等生産要具の使用に
對して、如何なる代償を支拂ふか。生産要件、
即ち土地家屋衣類道具食物等の購求または賃借
に對して、勞働者が提供し得可き唯一物件は勞
働の一部あるのみ。然るに通常資本家が生産資
料の貸與に對して要求する所は甚だ大にして、
勞働生産物の大部分は勞働者の手より奪はれて
生産に參加せざる者に依り消費せらる。而して
怠惰なる生産手段の所有者は、最も勤勉熟練な

る勞働者と等しき程度の享樂を受くるのみなら
ず、實に十倍百倍若くは千倍の富を享受す。

機械材料等の形に於ける資本なければ、勞働
は比較的不生産的なる事明白なれば、勞働者が
其使用に對して支拂ふは正當なり。只問題は勞
働の生産物の幾許が生産要具の使用に對して引
渡さる可きかにあり。これが使用の價值を測定
するに二標準あり。勞働者の標準と資本家の標
準とこれなり。勞働者の標準は資本の消耗を回
復する程度の報償に加ふるに、資本の所有者又
は整理者に生産的勞働者と同じ程度の生活を營
むに足る報酬を以てしたるものを以て足れりと
し、これに反して資本家の標準に依れば、資本
機械その他の使用に依り同一勞働が生産する事
を得る餘剩價值の全體を以て資本を蓄積し、之
を貸附くるものの知能と熟練とに對する報酬と
なす可しと言ふなり。

餘剩價值は史初以來資本家勞働者間の闘争の

目的物にして、その結果は常に資本家が價值の大部分を占有する事に終れり。而して利潤地代を以て勞働者に依りて創造せられたる價值の一部と觀る事は、タムソン以來先づ英吉利に續いては大陸に於ける社會主義者文獻の流行思想となれり。斯て勞働掠奪説は勞働價值説と緊密なる干係を結ぶに至れるなり。

カール・マルクスは餘剩價值説を論理上の究極まで押詰めたり。その大著『資本論』の初めに於て斷案を下し、一物生産の爲め社會的に必要なる勞働は、實に價值決定要素の最も重要なものに止らずして、具象化されし社會的勞働時間、即ち結晶化されし勞働は、價值の本體そのものに外ならずと云へり。マルクスはタムソンの如く、資本家の利潤をなす新價值は、生産要具の生ずる所に非ざる事を斷言せり。何となれば資本は生産物に價值を移轉するも、價值を創造する能はざればなり。此意味に於て價值の唯一源

泉は勞働なり。然れども資本家は無償にて勞働力を購ふ能はず。之に對して市價を支拂ふ。而して餘剩價值生産の爲には勞働者をして、其の受くる賃銀再生産の爲めに必要なるよりも、長時間の勞働をなさしむるを必要とするは勿論なり。斯の如くして勞働者の勞働時間は二部分に分たる。第一は彼の生活手段の價值を再生産する、即ち必要勞働時間、第二は餘剩價值を創造する、即ち無報酬勞働時間これなり。

餘剩價值源泉の理論は、『資本論』の經濟學的社會學的組織の精髓をなすものにして、缺點あるにも拘らず十九世紀後半の經濟學史を飾るの勞作なり。而して此の教理が、社會主義運動の歴史に比類なき役目を演じ、また勞働運動の信仰條となれるも、決して怪しむに足らざるなり。さは言へ、彼に依りて構成せられたるが如き餘剩價值論は、科學的の立場よりは承諾する事能はず。此説は眞理にも非ず、また實際上の

目的にとりても必要に非るなり。そは誤れる根底に立てり。マルクス如何に強辯するも、勞働は價值の本體に非ればなり。彼に勞働を價值の本體と認むる事に依り、救ふ可からざる事實との矛盾に陥没せり。兎に角吾人は先第一に、マルクス、タムソンに依りて唱導せられたる價值論は、古典派の學説に非る事を記憶するの必要あり。

相對的勞働價值説とも名つく可き、リカルドに至りて全く大成したる古典派の價值論は、決して商品の價值を以て具象化されし勞働なりと主張せず。勿論リカルドは重きを生産的勞働に置くも、そは價值の一要素としてのみ。分配の法則を研究するに當り、リカルドは商品の價值は生産に投せられたる勞働の割合に依るとの假定より出發せり。これ恰も續釋的經濟學が『經濟人』の假定より出發すると同様なり。此方法が當を得たりや否やは問題なるも、彼は常に其

の假定として認め決して之を實際事實の表現なりと認めたる事なし。彼は商品の價值に勞働以外の他の要素が干係せること及び更に進んでは商品の平均代價は、決して投せられし勞働價值と比例せざる事をさへ認めたるなり。然るにマルクスにありては、勞働は價值の本體にして、價值は凝結したる社會的勞働、即ち結晶勞働以外には之なしとせり。此説は余が絶對勞働説と言ふ所のものにして、表面上はリカルドの説と相關連するも、實は相容る可からざる別個のものなり。リカルドの如く勞働を價值決定の一要素となさば、勞働を價值の本體となす能はざる可し。然も此區別に對する深き注意は何時しか失はれし爲め、マルクスの説はリカルド學説の論理的發展として多數の人に認められ、敢て怪しむ者なきに至れり。『資本論』の著者自身もリカルドと同一觀察點より出發せるものなる事を承認せり。其結果絶對勞働價值説の論理的產物

たる餘剩價值説は、古典學派の價值論の必然的の產物と認めらるるに至れり。然れども餘剩價值説が、古典學派の價值論に根底を有すと云ふは誤謬にして、餘剩價值説は實際の事實と全然相容れざる絶對勞働價值説より出發するものなり。

マルクスの意味に於ける餘剩價值説、即ち勞働を以て價值の本體なりとなす説が果して社會主義の缺く可からざるものにして、之を否定する時は勞働掠奪説は成立せざるものとすれば社會主義者は絶望するの外なし。社會主義者の爲めには幸にして事實は然らず。蓋し、餘剩價值説は誤謬たると同時に社會主義者に取り不必要のものなればなり。吾人は餘剩價值説の抉を繕る事なくして能く勞働掠奪の結論に到達す。從來並に現在の社會に於て、勞働の掠奪が行はるるの事實は何等の價值論と干係なく之を立證する事を得るなり。例へば三鞭酒の高き價值は、

投せられたる勞働力に由らずして、需要に對して其の稀少なる事、即ち結局、特殊の葡萄を生ずる土地の稀少なる事に基つく。然かも猶ほ葡萄栽培地の地主が收得する地代は無勤勞所得にして、勞働掠奪の結果なる事に至ては敢て他の場合と異なる所なきなり。勞働掠奪は生産論に屬せずして分配論中に屬す。而して其の原因は人が物に對して有する權力を移して、他の人間に對して揮ふ權力となし得る可能に存するなり。

斯の如くタムソン、マルクスに依りて絶對勞働價值説の必然的結果として論せられし餘剩價值説は、一の誤謬に過ぎざるも、然かも尙社會主義の取て以て利用す可き重要な思想の萌芽は其の中に含まる。蓋し勞働は價值の絶對的本體に非れども、事實上費用の絶對的本體として觀る事を得るを以てなり。此區別を知らんが爲めには、價值及費用なる二つの根本的概念の區別を把握せざる可からず。經濟學上の價值とは

或目的を充足せしむる手段^{ミイン}を言ひ、費用とはその價值の生産に必要な支出を言ふ。

勿論生産に於て種々の物質も亦費やさる可しと雖も、それは人間の一部分に非れば絶對的費用と言ふを得ず。實際上絶對的費用の本體は人間勞働以外にあるなきなり。而して勞働を絶對的費用の本體と認むる事は、即ち人は勞働を以て生産行程に於ける唯一の能動的要因と觀るに外ならず。換言せば、生産は勞働のみの所産なりと斷するを得るなり。技術的並に物質的觀察點より見れば、人間は他のものの如く機械力の表現に過ぎず。即ち人間と動物または機械の勞働との間に區別なしと雖も、經濟現象を人間の問題として觀る經濟學者の見地に立てば、人間の勞働は即ち人格の費消なるを以て、機械の活動と同一視する能はず。人間の勞働は生産の唯一の動因たるなり。

斯くして吾人は、富は人間勞働のみに依りて

生産せらるるこの結論に到達せり。勿論勞働と言ふは雇傭せられたる勞働のみならず、一切の精神的肉體的社會勞働に従事する人の勞働をも含むなり。此見地より吾人は、一切の富を社會的に必要な勞働時間量、即ち結晶時間として觀察するを得。吾人は『資本論』の著者に依りて爲されたる誤謬を反覆して、勞働のみが商品の價值を決定すと斷定せざる可し。素と價值は極めて複雑なる社會現象にして、只其の一部分を生産の勞働に負ふのみ。然れども勞働と價值との間の相互關係が如何なるにもせよ、勞働は其の絶對的生產要因たる特別なる獨立の意義を失はず。科學は人間勞働と密接なる干係に於て、一切の富を分析するの妥當を認むるなり。

右に述べたるが如き勞働費用説は、之をマルクスの唱導したる勞働のみ獨り價值を創造する力ありとの説と混同す可からず。これ等二説は決して論理上同一に非ず。而して勞働費用説より

出發すれば、余剰價值論は實際生活と大なる矛盾なき様修正せらる可し。勿論今日社會各階級間に於ける生産物の分配は、勞働費用に比例して行はれずして價格に依つて左右せらる。然し一定の經濟制度の價值を評定するに方つては獨り其制度の下に創造せられたる社會的富の分量のみならず、同時に其富に具體されたる勞働費用の分量、換言すれば如何なる代價を以て此富が購入せられたるかを測定する事最も重要なり經濟進歩の唯一確實なる尺度は、勞働の生産力の度合にて現はさる。然らば勞働の生産力とは何ぞや。勞働の生産力とは要するに勞働費用を反面より觀たる觀念に外ならず。即ち一定の富を造るに一定量の勞働を要すとせば、是れ其の富を造る爲めの勞働費用にして、其の反對に一定量の勞働を投ずる事に依て一定量の富が得らるとすれば、其の結果たる富の量は勞働生産力の程度を表示するものに外ならざるなり。

勞働費用が經濟學の必要なる範疇なりとせば余剰價值説も亦然り。マルクスが一日の勞働時間を二部分に分ちて、必要勞働時間及び余剰勞働時間となしたるは當を得たり。必要勞働とは、社會的勞働に参加せる一切の勞働者に取り必要なる物資の生産に要する努力の量にして、余剰勞働とは、社會の非勞働階級を維持する爲めに投せらるゝ所の勞働なり。必要勞働余剰勞働の觀念は、掠奪學説を始めて完全ならしむ。サンシモン學徒は資本主義社會に於て奪掠が行はるゝ事實を斷言したりと雖も、掠奪の程度如何及び社會の進歩に連れて掠奪の程度は進みつゝあるか減退しつゝあるか、若しくは如何なる産業如何なる國に於て掠奪の行はるゝ程度甚しきかは之を研究する事能はざりき。是等に對する確實なる解答は、必要勞働、余剰勞働の觀念を得て始めて與へらるゝ事を得るなり。

勞働費用説に依る勞働掠奪説の修正中、今一

つのものは更に重要な意義を有す。勞働の投費と其生産力の程度とは根本的且つ決定的の事實なり。唯物史觀に對する吾人の態度は如何なるものにせよ、如何なる經濟學者社會學者も、社會現象に視て經濟現象が重要な役目を演じつゝあるの事實を否定するものあらざる可し。様々の形に於ける社會的掠奪の干係は、一定の生産條件に遡る可き一の派生的現象に過ぎず。社會的勞働の生産力、若しくは社會的勞働費用の概念は掠奪説と生産力の發達に基づく社會發達の理論とを連結する架橋をなすものなり。而して此點に於て勞働費用の概念の眞意義は存す。吾人が絶對的勞働價值説を否定し、勞働を價值の本件と認めざる場合に於ても此概念の重要は變ずる所なきなり。或は絶對的勞働費用の學説と掠奪説との結合に由り、後者は其の倫理的意義を失ひて一個の經濟原則に墮する事なきやと言ふ者ありと雖も、決して然らず。蓋し勞働費用の概

念其者は、既に倫理的要素を含めるを以てなり事實に於て生産に参加する事は、獨り人間のみならずして他の物的生産手段も亦之をなす。然らば何故に吾人は人間の勞働と馬の勞働とを同一視せず、一切の生産物を獨り人間勞働のみの所産として之を觀るか。他なし暗黙の間に吾人が人格の尊貴、人格の平等なる社會主義の主要倫理觀念より出發せるを以てなり。人格の平等を理解せざりし古代人にとりては、馬の勞働と奴隸の勞働との間に區別を劃すること不可能なりしならん。彼等は恐らく自由人と奴隸の勞働との間に區別を設くる事を要求したるなる可し。斯の如く人間平等の觀念は、絶對的勞働費用なる範疇の基礎をなせり。即ち掠奪説は、社會主義は倫理的要素を以て貫かる事の事實を再び茲に立證するものなり。而して之あるが故に社會主義的理想は尋常普通の良心ある人にとり不可避なる論理的普遍的歸結として承認せらるるなり。(Tugan Baranovsky, Modern Socialism, ch. I. Section II大意。)